
記憶の彼方

からたちみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶の彼方

【Nコード】
N8278D

【作者名】
からたちみかん

【あらすじ】
懐かしい記憶を辿っていけばやがてふたりの思い出が重なり合ってゆく。

眩い光に包まれた思い出が甦る。

母は古い言い方をすれば妾で父の愛人という存在だった。事情があつて結婚できなかったということを大人になれば理解できるようになったけれども。あの頃はガキだった。

幼い時からどうして父と母が一緒に暮らしていないのか？ どうしてうちは他の子の家と違うのか？ それが嫌でたまらなかった。

小学校も高学年になると無駄に大人の言葉も覚えて「愛人の子供」などと、からかわれるようになった。自分のことを言われるのは我慢できても親のことは話が別だ。

熱を出しては学校を休むような病弱な子供だったのに喧嘩は強かった。運動神経がよかったわけでもないのに軽口ではじまった喧嘩で負けたことはない。からかってきた子供たちと喧嘩して。怪我をさせて先生に怒られた。

その度に母は学校に呼び出され、怪我をした子供の家に謝りに行って。母には苦勞をかけたものだ。

あれは中学二年生の夏休だ。母と父のことについて大喧嘩して家を飛び出した。と、いつでも自分が一方的に怒っていただけだったけれども。

中学生だから金もない、知恵もない。あるわけない。電車に飛び乗って誰も知らないところへ行こうと企んだ。

隠れて電車を乗りついて行く。西日が電車の中に入り込む頃には遠い場所まできていた。

わからない駅名ばかり。電車に乗っていただけなのに疲れ切つてクタクタになっていた。ボックス席に座ってぼんやりと流れていく景色を眺めていた。黄昏の色。

向かい側の席に小学校二、三年生くらいの女の子が一人で座っていた。夏休みに一人で田舎のお祖母ちゃんの家遊びにいくといっ

た感じの。目が合うと女の子はにっこりと微笑んだ。幸せなのだろう。自分と違って両親がいて、田舎に行けば優しい祖父母がいる。かわいがられているのだろう。と、勝手に想像してひがんだ。実に身勝手な憎しみだ。

自分ばかりが不幸なのだと暗い根心になつて。そんなことを考える自分が嫌だった。

と、電車の中が暗くなった。トンネルに入る。耳がツンする。長いトンネル。暗くいつまでも続きそうな。不安がよぎった瞬間。目の前に開けたのは眩い光だった。

トンネルを抜けると息を飲むような美しい景色が広がっていた。夕日に輝く海と凜とそびえ立つ山。頂上は夏だというのに白い雪が残っていた。あんなに神々しい山を見たのははじめてだ。美しい峰に一瞬で心を奪われた。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

女の子が心配そうに見つめていた。

「どこか痛いのか？」

「え、あ……」

女の子の問いに自分が泣いていたことにはじめて気づいた。涙が溢れて止まらない。

自分がちっぽけな存在に思えた。自分だけが不幸なのだと思います。自分でいたことが馬鹿らしくなる。見ず知らずの小さな子供ですら誰かを気遣う優しい心があるのに。自分はどうしてこんな卑屈になつていたのだろう。

世間と違う家庭でもいいじゃないか。

母にすまないと思つた。

「何でもないよ、大丈夫だから」

涙を拭う。

「目にごみが入っただけだよ。涙で流れたから大丈夫」

自然に笑っていた。女の子は一瞬ボカン、とした顔をしてからにっこりと微笑む。

「よかった」

顔を見合わせてふたりで笑った。

「きれいな景色だね」

「うん」

女の子は頷いた。

「お兄ちゃん、これあげる」

女の子が差し出したのはキャラメル箱。

「ありがとう」

素直に受け取ってとても優しい気持ちになる。さっきまでのモヤモヤがどこかへ吹き飛んでいた。

歡喜に満たされる。

時が経つのも忘れて美しい景色を見つめていた。夕日が海に沈んでゆく。山が夕焼けの色に染まっていた。永遠に続けばいいのに。電車のスピードが緩やかになった。どこなのか知らない到着駅のアナウンスが流れる。女の子は降りる用意をはじめた。

「あたし、ここで降りるの。お兄ちゃんはどこに行くの？」

問われて、思う。

「帰らなきゃな。家に」

きつと母が心配している。

「そっか。じゃあ、またね。さようなら」

言つと女の子は小さな手を振って席を離れた。電車から降りるとき女の子は振り返った。

女の子はやはり笑っていた。ホームには女の子のお祖母ちゃんらしき人物が迎えにきていた。嬉しそうに駆けてゆく背中。女の子は振り向いた。ドアが閉まり電車が発車する。

見えなくなるまで女の子は手を振っていた。同じように俺も見えなくなるまで女の子に手を振り続けた。

懐かしいことを思い出したのは母からの電話がきつかけだった。

『もうすぐお祖母ちゃんの七回忌だけどアンタどうする？ 来るの？』

秋田のお祖母ちゃんが亡くなってそんなに経つのかとあたしは年月の流れを感じた。大好きだったお祖母ちゃん。

「うん、行くよ」

もちろん行くと返事をする。

『雪斗君も連れていらっしやい。お父さんが喜ぶから』

と、母。雪斗さんはあたしの彼氏だ。はじめて実家に連れていった時、なぜか父と仲良くなり今では将棋仲間だったりする。父はあたしが実家に帰るより雪斗さんが一緒の方が喜んでいいるのではないかと思う。もちろん母も雪斗さんを気に入っているので娘としては嬉しい限りだ。

「聞いてみないと分からないけど、連れてく」

それから他愛もない会話を交わして母からの電話を切った。

秋田のお祖母ちゃんの家に行くのは何年ぶりだろう？ 子供の頃は夏休みになると家族旅行を兼ねて秋田に遊びにいったものだ。いっただったか途中から一人で電車に乗ってお祖母ちゃんの家に行ったことがあった。あれは小学校三年生の時だったか。

その時のことだ。『お兄ちゃん』に出会ったのは。電車の中で偶然あたしの向かい側に一人のお兄ちゃんが座っていた。自分より年上のお兄ちゃんは小学校高学年？ いや、中学生くらいだろうか？ きれいな男の子だった。はつきりと顔を覚えはてはいないけれどそんなイメージが残っている。忘れられないのはお兄ちゃんが突然泣き出しからだ。

あたしは驚いて心配になってオロオロしてしまった。けど、お兄ちゃんは「大丈夫」と言って笑っていた。西日が差し込む。お兄ちゃんの顔が霞んで見える。窓の外はキラキラと輝く海と、あたしの大好きな「鳥海山」が見えた。電車から見るのははじめてだった。圧倒的なのに悠々とそびえ立つ鳥海山がいつも以上にきれいで優しく見えた。

もしかしたらお兄ちゃんも鳥海山に心を奪われたのかもしれない。お兄ちゃんは、きれいだね、と、穏やかに言った。あたしは夢中になって頷いた。

ああ、そうだ。あの時あたしは持っていたキャラメルをお兄ちゃんにあげたんだっけ。お兄ちゃんはあるがとう、と、言って微笑んでいた。降りる駅が近づいてお祖母ちゃんがホームまで迎えにきてくれていた。あたしはおにいちゃんに「またね、さようなら」と、言って手を振った。どうして「またね」と、言ったのだろうか？ また、会えるわけがなかったのに。でもあたしはいつも友達にさよならするときの癖で「またね」と、言った。

電車が発車して見えなくなるまであたしはお兄ちゃんに手を振り続けた。お兄ちゃんも電車の中から手を振っていた。

思えばこれがあたしの初恋なのだ。思い出すたびにドキドキする。何度も思い出して記憶をリピートしていた。だからこんなにもきれいな記憶として残っている。

お兄ちゃんは今、どうしているのだろうか？ どんな風に成長しているのだろうか？ 想像して考える。偶然出会ったとしてラブロマンスは生まれるだろうか？ いやいや、記憶はきれいなまま。思い出として残っている方が幸せだ。

だいたい、雪斗さん以上に好きになれる人なんかいるわけがない。って、思うのもなんだか悔しいような気がした。

あたしは独りで苦笑いを浮かべた。

「何一人でニヤニヤしているんだ？」

突然の声に跳び跳ねるほど驚いて小菅有香は振り返った。背後にいたのは有香の彼氏である雪斗彰だった。

冬も近い休日。有香は家でマツタリとくつろいでいた。そろそろ夕飯の支度でもしようかと思っていた時、母から電話があった。電話が終わり、ふいに思い出した記憶に有香は浸っていた。雪斗が部

屋に入り込んだ物音さえ気づかなかった。

「あゝ、びっくりした。驚かさないでよ。いつ来たの？」

「今さっき」

と、雪斗は短く答えた。それにしても本当に猫のような人だ。アパートの鍵は渡してあるのでいつ来てもおかしくない。けれど気がつくといつも雪斗がいる。極自然に。猫のように気配もなく。

「お前が鈍すぎるのだろう。俺はいつも堂々としてきているぞ」
偉そうな言い方も雪斗が口にとすると妙にシツクリしている。

「どうせ、あたしは鈍いですよ」

嫌みはたつぷりこめて有香は言い返した。が、雪斗は気に止める様子もなくすでにくつろぎモードに入っている。部屋の戸棚から将棋セットを取り出して一人で指しはじめる。その姿を見て有香は口を開いた。

「あ、そうだ。雪斗さん来週の日曜日って空いている？」

「特に何も」

有香を振り替えることなく雪斗は答えた。有香は雪斗の側に近寄ると座り込んだ。雪斗が広げた将棋盤覗き込む。

「秋田のお祖母ちゃんの法事に行くんだけど雪斗さんも来る？」

雪斗は顔を上げて有香をじっと見つめる。栗色の眼差しは一見すると不機嫌な顔に見えなくはない。実際、出会った頃は職場で見かけるたびに不機嫌な顔をしているなあと、思っていた。不機嫌でそういう眼差しをするのではないと誤解（？）が解けたのは実際に話すようになってからだ。こういう人なのだと理解出来ると雪斗の淡々として不機嫌に見えるのは気のせいなのだとわかった。逆に面白い人なのだと思うようになった。誰にでもいい顔をする人よりよっぽど素直だと好感が持てた。

「雪斗さんもおいでって、お母さんが」

「わかった、行く」

答えると雪斗は再び将棋を指しはじめる。その姿を有香はつくづくと見つめた。

「本当に、将棋好きだねえ」

はじめて実家に雪斗さんを連れて行つて以来、雪斗は有香の父に感化されてすっかり将棋にハマっていた。

「息抜きには丁度いいぞ」

やるか？ という問いかけに有香は首を横に振った。

「遠慮しておきます」

雪斗のように頭脳派の人間に知恵を必要とされるゲーム盤でかなうわけがない。そもそも将棋だの碁だのオセロだの。ちまちましたゲームは苦手だ。有香はため息をつくと立ち上がった。

夕飯の用意しよう。

心の中で呟いて有香は夕飯の支度をはじめ。今夜のメニューはキリタンポ鍋。秋田の名物だ。実にいいタイミングである。

有香が夕食の用意をしていると雪斗が台所にやってくる。台所といっても1DKの狭いアパートで部屋に直結している。

「今日はキリタンポ鍋だよ」

有香の言葉に雪斗はコンロと土鍋を用意する。雪斗は料理をしない。けれど、料理をする有香の姿を見ているのは好きらしい。有香が料理しはじめるとちよろちよると台所にやってくる。有香からしてみれば手伝っているか邪魔しているのかわからない。が、心意気はかつて好きにさせている。ひとり寂しく準備するよりも喋りながらの方が楽しい。

「来週、秋田行くのにどうする？ 日帰りで行く？ それとも泊まりがけにしようか？」

「だからキリタンポ鍋か？」

有香の問いかけの、秋田、というところだけ反応して雪斗は答えた。

「うん。偶然だけとちょうど良かったよ。シメには稲庭うどんもあるよ。あと秋田の日本酒も買ってきた。バッチリ」

「秋田づくしだな」

「でしょ？」

有香は満足げに笑っている。

「ハタハタはないのか？」

「ハタハタ！！ さすがに仙台のスーパーには売ってなかった」

秋田名産物のハタハタ。と、言い出したらキリがなくなりそうだ。
「で、秋田行くのにどうするのって？」

「秋田は、仙台からだとな新幹線か？」

「うん」

「ジンさんとアサコさんは？」

「お父さんとお母さんは土曜日に新幹線で行くって言うていたけど、一緒に行っちゃう？」

雪斗は有香の両親のことを普通に名前で呼ぶ。今までの彼氏は『お父さん、お母さん』と呼んでいた。これが一般的な反応だと有香は思っていた。が、雪斗曰く「人のことを名前で呼ぶのは当たり前だろう？ 小菅さんじゃ皆一緒だ」とのことだ。言われてみればその通りである。

「いいよ、一緒に」

雪斗はゆつくりと頷いた。

土曜日。仙台駅で有香の両親と待ち合わせして新幹線で秋田へ向かった。早速、雪斗と父の稔は将棋談義に花を咲かせている。

「ついていけないよね」

有香の呟きに母、麻子が苦笑いしていた。

仙台から秋田までは新幹線あきたこまちで二時間以上かかる。途中盛岡からは新幹線といいながら在来線と同じ線路を走る。のどかな景色も新幹線にまで将棋盤を持ち込んだ父と雪斗の姿に遮られていた。二人席を向かい合わせにして四人で座っている。景色を見るわけでもないくせに窓際の席を男二人で陣取っていた。

「飽きないものだね」

「いいじゃない仲がいいのは。雪斗君ならいつでもお嬢にきてくれ

てオツケーよ」

と、母は無言の圧力を匂わせて笑う。一瞬だけ顔を上げた雪斗と目が合った。栗色の瞳は吸い込まれそうな色をしている。不思議だ。ずっと前から知っているような気がした。雪斗と知り合ったのは二、三年前なのに。デジャビュのように思い出せないイメージがちらついていた。

「どうなのよ」

こっそりと母が伺うように問いかけてきた。もちろん結婚は、ということだ。

「わかんないよ」

母の質問は答えようがない。有香は女姉妹ふたりで姉はすでに結婚して嫁に出ている。自分が婿をもらってという考えがなきにしもあらずだがそれは相手次第だ。

雪斗がどう思っているのかわからない。

「昔さ、あたしひとりで途中から電車で秋田に行ったときのこと覚えてる？」

有香は半ば強引に話を変えた。

「ああ、あったわね。そんなこと。懐かしいわね。秋田から仁賀保までひとりで電車に乗ったのよね」

「この間お母さんから電話あった時に思い出して。懐かしいなって思ってた」

「知らないお兄ちゃんと一緒にだったとかって、喜んで言っていたわね。本当にアンタは昔から人懐っこいっていうか、ねえ」

「一緒だったっていうか。たまたま向かい側の席に座っていただけだよ。だってさ、泣いていたんだよ。ビックリして話しかけたくなるよ？」

有香の言葉に雪斗は驚いたように振り返った。

「どうしたの？ 雪斗さん？」

「あ、いや、何でもない」

歯切れ悪く雪斗は答えて将棋を指す。

「雪斗くん。待った」

父、稔が雪斗の一手に腕を組んで頭を捻る。

「待ったなしですよ。ジンさん」

雪斗はにっこりと笑みを浮かべた。

雪斗はひとり駅のコンビニに入りぶらぶらしていた。電車の中で聞こえた有香の言葉がひっかかる。泣いていたお兄ちゃん。偶然にしても、と、雪斗は思う。

昔、家出した時のことを思い出す。ひとりで電車に乗って遠くまで行ったことがあった。

感動的な景色に心を揺さぶられて泣いた。その時、向かい側には女の子が座っていた。

まん丸の笑顔。

「まसान、な」

呟いた視線の先に見覚えのあるキャラメルのパッケージ。あの時、女の子からもらったものと同じキャラメルだ。もしかして、と、雪斗はキャラメルを手にとった。

会計をすませてコンビニを出ると有香が駆けてくる。

「いたいた。もうすぐ電車の時間だよ」

有香は雪斗の横に並んだ。雪斗を見上げ微笑んだ有香の顔を見つめる。同じく真丸の笑顔。似ているような気がするのだから人間の記憶というものは都合よく曖昧だ。

有香のまん丸の笑顔に惹かれた。よく笑う子だと思った。ぼつちやりとしていて丸顔で、有香のクルクル回る。よく動いて。ドジつて。苦笑いで謝っている姿を遠くで見ていた。

あの子の側は面白くて心地よさそうだ。

そんな思いで有香にちよっかいを出した。今は誰よりも近くで有香の笑顔を見ている。

有香は雪斗の服の裾を掴んだ。有香は腕を組むよりも雪斗の服の

脇側の裾を握りたがった。癖で落ち着くと有香は言った。はじめのうちには引つ張られてあまりいい感じではなかったけれど、慣れれば隣に有香がいるのだと実感が沸くようになった。ないと寂しい。

ふたりだった。秋田駅に着いてから有香の両親とは別行動だ。用事があるということで先にふたりで有香の祖母の家に行くことになった。

「天気がよくてよかった」

駅のホームから空を見上げて有香はうれしそうに微笑む。日が西に傾きはじめていた。緩やかな日差し。雪斗は頷いた。

「雪斗さんに見せたいものがあるの」

「何？」

「電車に乗ってからの楽しみ♪」
有香の声が弾んでいる。

アナウンスが流れて電車がホームに滑り込んでくる。ここからは在来線、羽越本線に乗り換えて有香の祖母の家がある仁賀保へ向かう。乗り込むとボックス席が空いていた。ふたりは向かい合って腰を降ろした。あの時と同じだ。

「ガキの頃さ。家出して電車に飛び乗ったことがあってさ」

「いつ？」

「中学の時。随分遠くまでキセルしたな。今でも電車に乗ると思いつく」

「へえ。どこまで行っただの？」

「覚えていない。車掌さんに見つかった時は熱出して意識朦朧としていたからな」

怒られた記憶はぼんやり残っている。けど、どうやって帰ってきたのか記憶から抜け落ちていた。ただ、あの記憶だけは鮮明に覚えている。

もう一度あの景色が見たかった。
美しい山の景色を。

「今日は大丈夫？」

雪斗はよく熱を出す。それを心配して有香は雪斗を覗き込んだ。

「大丈夫だよ」

電車が走り出す。雪斗は窓の外に目を向けた。それっきり会話は途切れてふたりの間には不思議な静寂が流れていた。時々そうだ。こんな風に静かになっても嫌な感じがしない。有香も窓の外に目を向けている。会話がなくても成り立つ空気。その心地よさに雪斗は安堵した。安らぎに身を委ねる。

轟音が響いて断続的にトンネルが続いた。

「雪斗さん」

「何だ？」

有香が思わせぶりに笑っている。轟音で聞き取れなかったけれど有香は「もうすぐだよ」と、言った。

光が、差し込んだ。

広がった景色に雪斗は息を飲んだ。あの時と同じ景色が広がっていた。

海と、西日と、美しい山の景色が。

「……ここだったのか？」

雪斗は呟いた。まさか、という予感があった。けれども信じることが出来なかった。

「きれいでしょ？ チョウカイサンっていうんだよ。

……雪斗さん？」

雪斗は、泣いていた。頬を涙が伝っていた。

「あ……」

有香が驚いたように雪斗を見ている。雪斗自身も驚いて顔を覆った。

「お兄ちゃん？」

小さく呟いた有香の声とあの時の女の子が重なった。あの時の女の子は有香だったのか？ 何という巡り合わせなのか。声にならない思いが込み上げる。

「何でもない。目にゴミが入っただけだ」

あの時と同じ答えを雪斗は言った。

「え？ うそお！ えええええ！？」

有香は雪斗以上に動揺して声を上げた。雪斗は涙を拭った。これ以上涙がこぼれないように目を瞑る。目を閉じたままでも雪斗は動揺した有香の顔が想像ついた。

「あの時のお兄ちゃんなの？ 雪斗さんなの！？ やだっ！ え？ あっ？」

あまりにも大きな声で他の乗客が有香と雪斗に視線を向けていた。気づいて有香は口を手で塞いだ。そんな有香と目が合って雪斗は笑う。真っ赤になったまん丸の有香の顔。困ったような、泣きそうだった。

けれども実際に泣いたのは雪斗だった。
いとしさが込み上げてくる。

「有香」

雪斗はポケットに入れていたキャラメルの箱を取り出した。それを有香に手渡す。

「雪斗さん……これ」

雪斗は頷いた。有香はキャラメルの箱を握りしめる。

「あの時と同じやつだね」

「ああ」

嬉しそうに笑って有香は窓の外に目を向けた。海に沈みゆく太陽キラキラと黄昏色に海は染まる。夕日を浴びて鳥海山の頂の雪が同じ色に輝いていた。

「雪斗さん。あたしの初恋教えてあげようか？」

悪戯っぽく有香は微笑む。雪斗は一瞬驚いて頷いた。有香の言葉に耳を傾ける。

それは懐かしい物語。

電車はどこまでも進んで行く。

ふたりの思い出と共に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8278d/>

記憶の彼方

2010年10月8日15時37分発行